



写真2—18 下稗田遺跡の墓地 (行橋市教育委員会所蔵)

腕輪が発見されている(写真2—19)。幼児の年齢は三〜四歳と推定されており、腕輪はアカガイの中央を穿孔し、研磨して仕上げた製品である。縄文・弥生時代を通じて小児用の棺から貝製の腕輪が出土した例は非常に少なく、九州では佐賀県大友遺跡・福岡県金隈遺跡^{かねのくま}などが知られるだけである。

豊前市河原田塔田遺跡は岩岳川中流左岸の標高五五メートルの低台地上に立地する遺跡で、前期末から中期後半にかけての墓地が

に隣接する遺跡である。標高二〇〜四〇メートルの丘陵上の広範囲に弥生時代前期末から古墳時代初頭にかけての墓地が展開しており、埋葬施設の合計は二四六基に達する。このうち副葬品の管玉が出土した棺は二基に限られるが、I・5地区に所在する中期後葉の49号甕棺墓では幼児の人骨とともに貝製の

調査されている。石棺墓や石蓋土壙墓がわずかにあるが、大部分は土壙墓で、合計五四基の埋葬施設が発見されている。ここでも副葬品の玉類が出土した棺は二基にとどまるが、1号墓から出土した細形銅戈は注目される遺物である。この銅戈が出土した位置は、遺体の喉元から胸に当たる場所であり、かつ全長一〇・六センチメートルの切先部分の破片であることと考へ合わせると、戦闘によって戦死した人物の埋葬施設と推測される。

大平村大塚本遺跡では最大幅四メートル、深さ〇・五メートルの溝で区画された、長さ一六メートル、幅一四メートルの方形周溝墓が発見されている(図2—64)。全体的に上部が開墾によって削平されていたが、箱式石棺墓一基・石蓋土壙墓二基・土壙墓一基が検出されている。周溝からは中期前半から後半の土器が出土しており、京築地域では最古の特定集団墓として注目される。

以上のように、京築地域の前期から中期の墓地のほとんどが共同体の構成員全員の集団墓地として形成されたものである。この時期、北部九州の先進地域ではすでに複数の銅鏡や武器形



写真2—19 前田山遺跡49号甕棺墓(行橋市教育委員会所蔵)

後期の墓地

京築地域の弥生時代後期の墓地には墳丘や周溝をもつものが現れる。その代表的な遺跡の一つ

銅製品などを副葬する有力集団の墓地が発見されているが、当地域では大塚本遺跡で方形周溝墓が確認されているにとどまる。このことは当地域が北部九州の他地域に比べて共同体内の有力集団の成長がやや遅れていたことを示すものである。

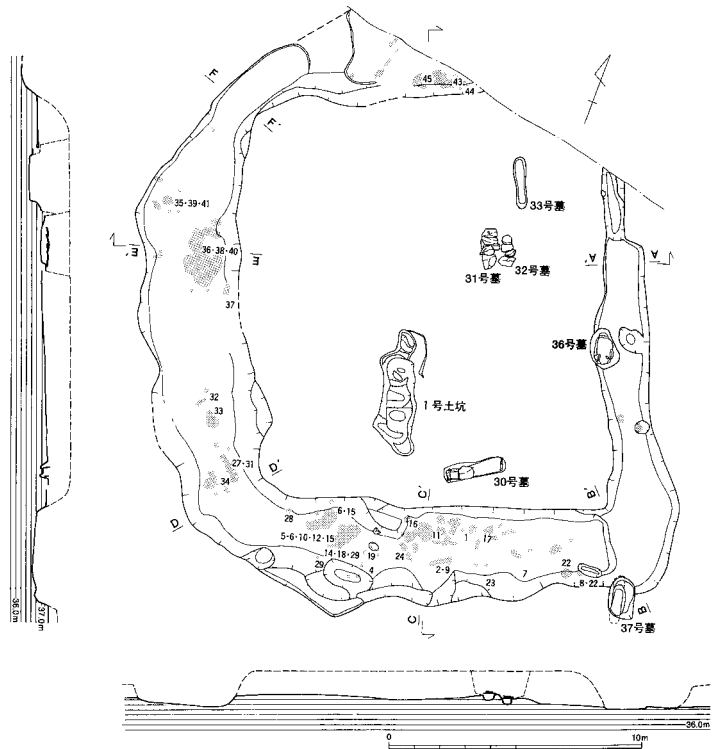


図2-64 大塚本遺跡の方形周溝墓

に、祓川の河岸段丘直上に立地する豊津町徳永川ノ上遺跡がある。当遺跡は旧石器時代から中世にかけての複合遺跡で、段丘上には北から居屋敷遺跡・鋤先遺跡・徳永川ノ上遺跡・神手遺跡などの遺跡が南北約七〇〇メートルにわたって続いている。徳永川ノ上遺跡では縄文時代に動物を狩猟した落とし穴が発見されているほか、弥生時代の集落・墓地、古墳時代の群集墳、中世の墓地などが調査されている。墓地は前期の土壙墓が単独で一基確認されているほかは、すべて後期末から古墳時代初期にかけての時期である。この墓地では盛り土をもつ墳丘墓が五基と、溝や区画された群として独立する墳墓群が一一基確認されている。これらの墳丘墓や墳墓群のなかには複数の棺が埋葬されているが、そのうちわけは墳丘墓で甕棺墓三基・箱式石棺墓八基・半石棺墓一基・石蓋土壙墓九基・木蓋土壙墓一基・木棺墓三基・土壙墓二基・礫床土壙墓一基の合計二八基、墳墓群では甕棺墓三基・箱式石棺墓七基・石蓋（木蓋を含む）土壙墓五二基の合計六二基で、両者を合わせると九〇基にのぼる。この墓地のもつとも北側に位置する4号墳丘墓（写真2-20）は南北の長径が一三・〇メートル、東西の短径が九・五メートルの楕円形の平面形をなし、最大幅一・一メートルの周溝で囲まれている。墳丘上には箱式石棺墓六基と土壙墓一基の合計七基の棺が設けられていた。4号棺は4号墳丘墓の中央付近にある箱式石棺墓で、棺の上方から鉄剣片・大形鉄鏃、蓋石付近から細形管玉が出土してい



写真2—20 徳永川ノ上遺跡4号墳丘墓
(福岡県教育委員会所蔵)

る。棺の床面の内法は長さ一・八五^{メートル}、最大幅〇・五五^{メートル}で、北東側に削り出しの枕、南西側にも石枕が設置されていたことから、複数の人物が埋葬されていたものと考えられる。また棺内には赤色顔料が敷かれ、北東側が盗掘されていたが、副葬品は良く残っていた。棺内の副葬品は細形管玉・極小勾玉などの玉類と素環頭刀子(図2—65・5)・銅鏡がある。銅鏡は中国

の後漢中期以降に製作された「長宜孫子」銘内行花文鏡で、直径一三^{センチメートル}の完形品である(同・10)。他の棺の副葬品で注目されるものにVI号墳墓群42号墓出土の鉄製釣針(同・4)と4号墳丘墓3号棺出土の鉄鏃(同・7)がある。釣針は五本がままとまって出土しており、長さ一一・四^{センチメートル}をはかる弥生時代では日本最大のものを含んでいる。これらの釣針は「超大型化」と「丸造軸の出現」という「弥生終末において一気に近代化を達成」した、時代の先端を行く製品である。また、鉄鏃も大形で透孔付きの形態をなし、「機能的には大きな透孔をもつことから流体力学を駆使し、破壊力を増加した鏃」で、滋賀県雪野山古墳などからも出土しているが、「分布の中心が京都平野にある」ことが分かってきている(柳田康雄『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第7集、福岡県教育委員会、一九九六)。徳永川ノ上遺跡の墳墓群ではこれら以外にも、副葬品として銅鏡五面や頭飾り・耳飾り・首飾り・腕飾りなどの装身具や、鉄剣(図2—65・8)・鉄斧(同・1)・鉈(同・6)・鉄鎌などの鉄製品が全体の約四割にあたる三七基の棺から発見されている。このような発掘成果から、徳永川ノ上遺跡は三世紀の邪馬台国の時代に京都平野の南部地域を拠点としていた首長層の歴代の墓地と考えられる。

後期の首長層の墓地は京都平野周辺で他にも方形周溝墓がいくつかが発見されている。下稗田遺跡では同時期の集落から離れ

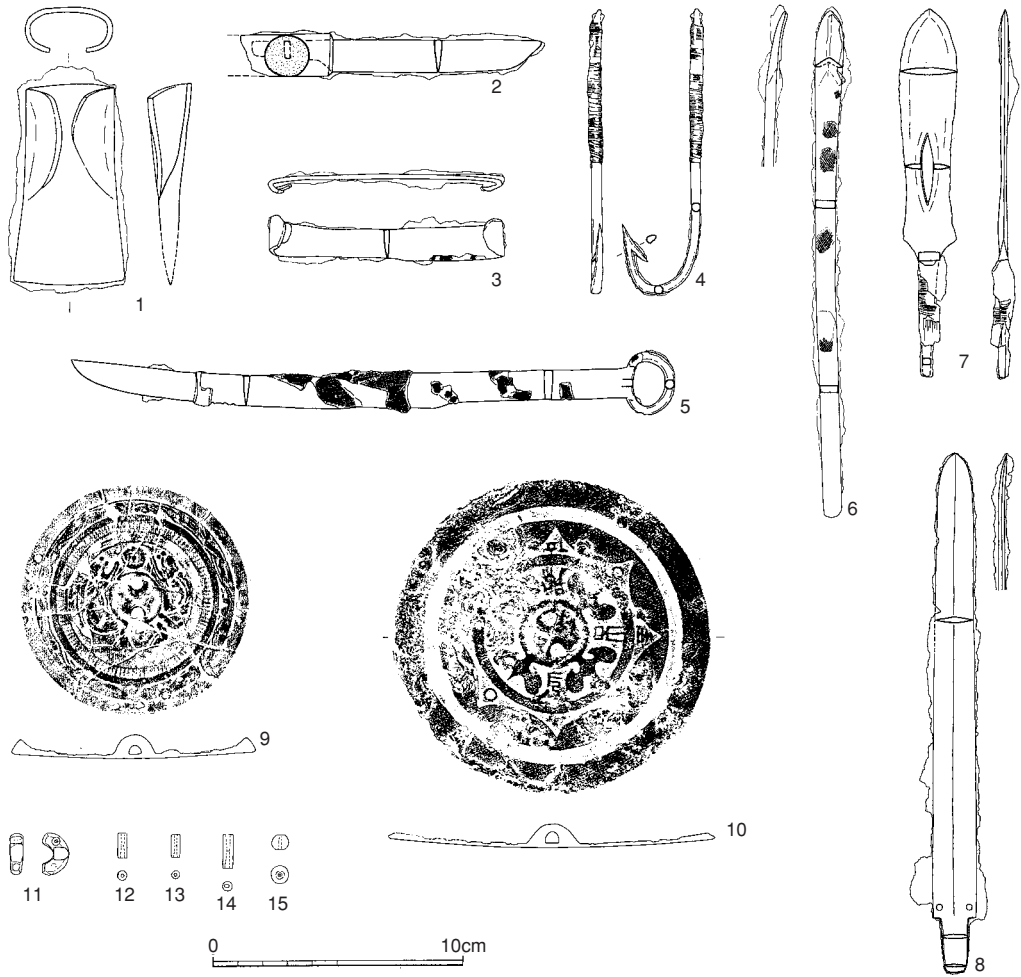


図2—65 徳永川ノ上遺跡墳丘墓等の副葬品（8が縮尺2/9、他は縮尺1/3）

た南東側の丘陵上で、全体の三分の一程度が残存する墓地の一部が調査されている。周溝は一辺が約二二呎で、北東辺の中央部は溝が途切れていて墓地内に入る通路になっていたと考えられる。周溝で囲まれた内側は石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓など一〇基の埋葬施設と祭祀遺構一基が残存していた。副葬品はこのうち四基の棺から素環刀・鉄斧・鉈・刀子などの武器や工具が出土している。

行橋市竹並遺跡A地区10号古墳は東西一三・五呎、南北一二呎の方形周溝墓で、周溝からは祭祀に使用したと考えられる後期後半の高杯が出土している。周溝の内側には箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓など七基の埋葬施設があり、そのうち二基から鉄剣・鉄鏃・鹿角製品などの副葬品が出土している。

豊津町北垣古墳群は祓川中流西岸の標高八八呎の丘陵上に立地する。弥生時代の遺構としては中期の集団墓地と後期の方形周溝墓が発見されている。方形周溝墓の溝は西辺と南辺しか検出されていないが、全体では南北約一六呎・東西約一四呎の規模と推定される。中央部が古墳

時代後期の古墳で破壊されているが、石棺墓二基・石蓋土壙墓四基・土壙墓一基が残存していた。副葬品は8号石棺墓から鍬身部に溝状の透穴がある大形の鉄鍬が二点出土している。この墓地は節丸地区の小盆地の首長層の墓と考えられる。

京築地域南部では大平村穴ヶ葉山遺跡が後期の代表的な墓地である。当遺跡は大分県との県境をなす山国川西岸の標高七〇メートル前後の丘陵斜面に立地する。東側約一・二キロの山国川沖積地には後期の環濠集落である唐原地区遺跡群が所在する。当遺跡は弥生時代終末期の集団墓地で、石蓋土壙墓や土壙墓が八三基調査されているが、墓域は周辺の工場用地内にも広がっていたと考えられ、埋葬施設の総数は一〇〇基以上にのぼることは確実である(図2-66)。副葬品としては内行花文鏡片や勾玉・切子玉きりこたま・管玉・小玉等の玉類、鉄剣・素環刀・鉄鍬・刀子・鈍・鋤先などの鉄製品が、全体の約四六%を占める三八基もの埋葬施設から出土している。埋葬された人々は唐原地区の環濠集落の住人と考えられるが、副葬品の所有率が高いことは、山国川流域の拠点集落であった環濠集落の人々が他の集落の人々に比べて優越した生活をしてきた可能性を示すものと考えられる。なお、当遺跡に続く古墳時代前期の首長は、北東約八〇〇メートルに位置し、銅鏡二面を出土した前方後円墳の大平村能満寺3号墳を築造している。

前田山遺跡でも後期の墓地が調査されているが、古墳時代初

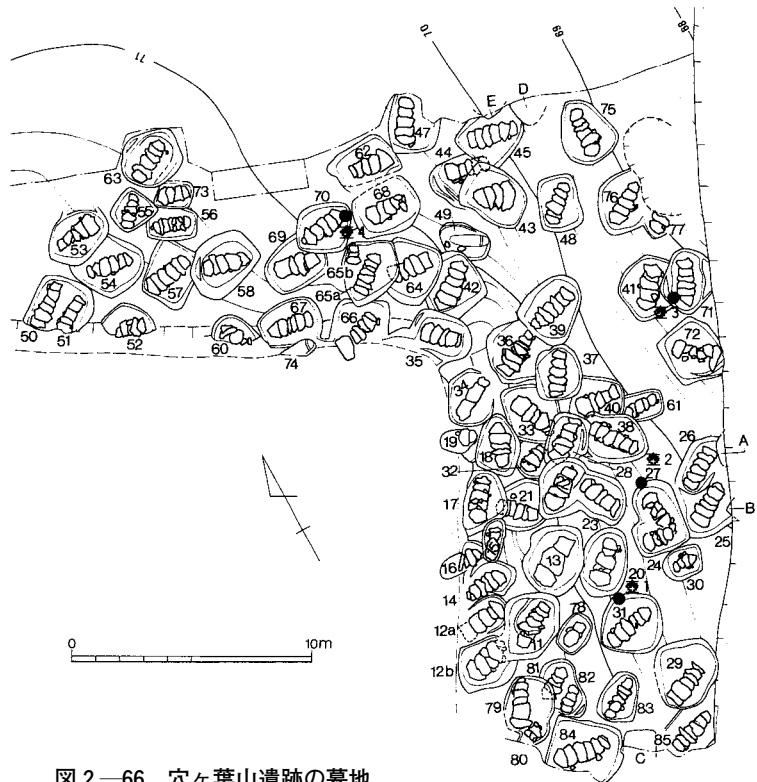


図2-66 穴ヶ葉山遺跡の墓地

頭の方形周溝墓を除くと、墳丘や区画施設をもつ墓地は検出されていない。ただし、I・4地区の9号石棺墓には銅鏡と素環頭刀子が副葬されていた。銅鏡は「長宜子君」銘連弧文鏡で、直径九・八五センチメートルをはかり、中国後漢代晩期の製品ではないかと推定されている。素環頭刀子は全長二六・六センチメートル、刃渡一七センチメートル

で、刃部の両面には平絹の可能性のある布が付着していた。

京築地域では後期になると特定集団の墓地が各地に出現してくるが、副葬品で見える限り北部九州の他地域と比較すると質・量ともにやや劣り、特に卓越するような首長層の墓は発見されていない。この時期、北部九州は瀬戸内海沿岸地域や畿内地域との相互の交流が非常に強くなり、当地域は瀬戸内海を介してこれらの地域の接点となっていたと考えられる。このため、当地域は独自性を発揮することなく、両者のせめぎあいの中に埋没していったものであろう。

三 道具の地域性

弥生時代に列島内の各地域で製作・使用された道具は、それぞれの地域の文化的特徴や地域間の交流などを考察する非常に有効な資料である。ここでは京築地域の土器・石器やその他の道具の変化を具体的にみていくこととする。

土器の変化 京築地域の前期の土器は、初頭から中葉の時期と地域性 では北部九州に広く分布する板付式土器と共通

する特徴をもつものである。当地域で最も古い前期の土器は行橋市長井遺跡や行橋市辻垣畠田・長通遺跡から出土している。前期の中葉から後葉になると京築地域ではだいに地域の個性が顕著になってくる。壺の文様に、それまでの羽状文うじょうもんに加えて綾杉文や円弧文・木葉文などが施されるようになる(図2-1

67)。特に、施文道具として、それまでのヘラ状工具以外にアカガイなどの鋸歯状の縁辺部を持つ二枚貝が多用される点が大きな特徴である。この二枚貝による施文は、山口県西部の響灘から瀬戸内海西端の周防灘沿岸地域に共通してみられる手法であり、遠賀川以西の北部九州とは別の文化圏を形成する要素となっている。

中期になると、ごく一部の地域で壺に文様を施すものが残るが、大部分は文様帯をつけない北部九州の広い文化圏のなかに包括されてしまう。特に、中葉には遠賀川以西の須玖式土器の文化圏の強い影響を受ける。ただし、甕の口縁部が「く」の字形になる古い様相は、当地域では中期の後葉まで根強く残る。

後期では、土器は西日本の広い範囲で比較的画一化されてくる。当地域でも中葉には高杯が瀬戸内海沿岸地域の影響をみせるし、後葉以後には壺や甕の底部が丸底化し始め、当地域の独自性はほとんどみられなくなる。

このように、京築地域の土器は前期後葉の一時期を除くと固有の地域色をもつ時期はほとんどなく、絶えず北部九州や瀬戸内海沿岸・近畿地方などの影響を受け続けていた。別の見方をすれば、当地域は弥生時代には列島内各地との交流が非常に盛んであったということができるとあろう。

次に他地域から当地域に持ち込まれたと考えられる土器をいくつかみてみよう。